

# 侍兼山俳句会

第七百三回

世話人 山田安廣・上田恵子・鈴木輝子・根来眞知子

東中 亂・向井邦夫・森 茉衣

令和七年八月十八日（月）

会場 大阪俱楽部 会議室

締切 午後二時

出席者

瀬戸幹三・山戸暁子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡 翠・東野太美子  
向井邦夫・森 茉衣・山田安廣

投句者

上田恵子・碓井遊子・小出堯子・西條かな子・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄・根来眞知子  
平井瑛三・東中 亂 以上出席者九名十投句者十名 計十九名

兼 題

文月・芭蕉（幹三） 線香花火（手花火）・新涼（暁子） 当季雜詠 通じて八句

次 回

例会 令和七年九月二十二日（第四月曜日）会場 大阪俱楽部会議室 締切 午後二時

兼題 蟻蟀・コスマス（幹三） 秋茄子・秋簾（暁子） その他当季雜詠

次々回

令和七年十月二十日（第三月曜日）

選者吟

筆跡のやうな雲ある文月かな

新涼や手を丸くして掬ふ水

飛び石を飛びゆく先に涼新た

幹三

新涼や会ふ人ごとにそのことを

暁子

横顔を覗く花火の明滅に

幾艘も船出すること芭蕉の葉

### 幹三 選

- ◎ 新涼の心地に選ぶハーブティー 太美子
- ◎ 雨音のはつきりしたる芭蕉かな 邦夫
- ◎ 芭蕉葉の夜は人影のごと窓に 晓子
- 手花火の柳のしだれ黙の時 眞知子
- ◎ 新涼や会ふ人ごとにそのことを 文月や星それぞれにもの言うて 邦夫
- 新涼や手にする野菜つややかに 晓子
- 文月の郵便受に親しき字 真知子
- 八月の海きつぱりと空分かつ 安廣
- ◎ 庭花火幼き指の賑やかに 輪
- 芭蕉葉を滑る零の早きこと 新涼や糊のききたるシャツを着る
- 筆太き書家の円相文月なる 芭蕉葉の傷みやすきを愛すかな
- 幾艘も船出するごと芭蕉の葉 輪になつて引く手差す手の盆踊り
- 横顔を覗く花火の明滅に 書く能力奪ひし病文月来る
- 宽容であれと古刹の大芭蕉 晓子
- 手花火は闇と夜風の仲間なる 眞知子
- 文月の古本まつり森の蔭 邦夫

太美子	邦夫	兵十郎
眞知子	安廣	かな子
邦夫	安廣	邦夫
眞知子	安廣	兵十郎
邦夫	安廣	邦夫
眞知子	邦夫	兵十郎
邦夫	安廣	かな子
眞知子	邦夫	邦夫
邦夫	安廣	兵十郎

### 幹三 特選句講評

- ・ 雨音のはつきりしたる芭蕉かな 邦夫
  - 芭蕉葉の夜は人影のごと窓に 晓子
  - 芭蕉葉を滑る零の早きこと 真知子
  - 筆太き書家の円相文月なる 邦夫
  - 幾艘も船出するごと芭蕉の葉 亂
  - 横顔を覗く花火の明滅に 太美子
  - 宽容であれと古刹の大芭蕉 邦夫
  - 手花火は闇と夜風の仲間なる 太美子
  - 文月の古本まつり森の蔭 邦夫
- ・ 芭蕉葉の夜は人影のごと窓に  
芭蕉の葉は大きさや形に加えて、その揺れ方に妖しいものを感じます。どこか淋しく、孤高を感じさせるところもあり、「夜は人影」という措辞にうなづけます。

邦夫	輝子
兵十郎	かな子
邦夫	邦夫
安廣	兵十郎
邦夫	邦夫
安廣	兵十郎
邦夫	邦夫
安廣	兵十郎
邦夫	兵十郎

・新涼や会ふ人ごとにそのことを  
猛暑が続くがふと朝晩に感じた一縷の涼しさ、そのことを自分で納得するためにも、人に話したいという気持ちです。秋の人恋しさも感じる句。

暁子

・釣糸の雲に宿る秋涼し

安廣

細い糸に付着した一粒の水滴に季節の変り目が見えた。俳人の目がよく効いている一句です。釣りの風景の想像もでき、新涼の雰囲気がよく出ています。

・庭花火幼き指の賑やかに

遊子

秋の夜の花火の楽しさが描かれました。「指の賑やかに」という措辞が新鮮。色とりどりの花火の光や、子どもたちの動きも見えてきます。

・手花火の終はり波音復活す

翠

花火の終わつた後の「闇」はよく描かれますが、この句は「音」で表現。海の近くでの花火遊びの景が見えます。「復活」は硬いので「聞こえけり」でも十分伝わると思います。

・祖母のゐて芭蕉の茂る家なりし

輝子

まるで水彩絵の具でさつと描かれたような淡白な句であ

る故に、庭の広さ、家の様子、祖母の暮しなど大きな想像の余白が読者に残されました。今回特選に選んだ句にはどちらも余白があります。十七文字の詩は余白が要だと思います。

暁子 選

◎故郷に人を訪ぬる文月かな

邦夫

新涼や窓開け放ち深呼吸

瑛三

闇の底芭蕉葉揺れて魔の気配  
ケロイドの師は黙したり原爆忌

遊子

実椿のつやつや丸く育つ日々

輝子

峡谷の瀬音かすかや秋涼し

兵十郎

◎後悔と慚愧の文月今年また

眞知子

新涼のかけらさへなし特攻碑

翠

雨音のはつきりしたる芭蕉かな

邦夫

文月の古本まつり森の蔭

乱

新涼や手を丸くして掬ふ水

幹三

祖母のゐて芭蕉の茂る家なりし

輝子

水求むごと枯山水の赤蜻蛉

邦夫

搖らぎたる芭蕉葉見上げ本堂へ

読み書きをスマートで済ます文月かな

我が庭に芭蕉あればと思ふ夕

全きも千々に裂くるも芭蕉なり

文月は再度ひそとく赤毛のアン

芭蕉葉を滑る季の早きゝ」と

◎文月や遺品となりし見舞状

筆跡のやうな雲ある文用かな

秋暑きそれでも出向くニシホ展  
新涼や手こする野菜のややかニ

飛び石を飛びゆく先に涼新た

◎文月や文読み返す動けぬ身

書く能力奪ひし病文月来る

文月の郵便受に親しき字

輝子 翠 恵子 幹三 眞知子 茉衣 幹三 恵子 安廣 かな子 亂 朱美 朱美 翠

曉子特選句講評

・故郷に人を訪ぬる文月かな

邦夫

文月は陰暦七月、陽暦では八月。お盆の月であるからお墓参りなどを兼ねて故郷へ帰られる方が多いだろう。もしかするともう「実家はないのかも知れない。しかし訪ねたい人がある。文月という難しい季語が生かされている。

・後悔と慚愧の文月今年また眞知子

この句も文月ならではの句。戦争体験者は毎年文月が来るところの思いを繰り返す。

・新涼や手を丸くして掬ふ水  
幹三

・新涼や手を丸くして掬ふ水  
新涼の候の水、いかにも涼し氣である。山あいの谷川だ  
ろうか、それとも日々の水道の水だろうか。中七で掬う様  
子を活写。

・文月や遺品となりし見舞状

惠子

この句は作者の受け取られた見舞状が、差出人の遺品となつたということだろうか。差出人は当時お元気だったのか、あるいは病んでおられたのか。そぞろ身に沁む句。

・秋暑きそれでも出向くゴツホ展

茉衣

上五「秋暑し」で切る方がよいか？これこそ本当のファ  
ン。季語とゴツホが合っているような気がする。

・文月や文読み返す動けぬ身

恵子

作者は足を傷められたとか。気になる文の内容かもしれない  
が、動けぬ身ゆえにどうすることもできない。あるいは  
は作者を慰める文だったかもしれない。文月と文、韻をふ  
んでいる。今回このように文月という月の名を、文（便り、  
文字）や書物と結び付けられた句がいくつかあり、皆様の  
工夫が思われた。

互選三句

朱美選

文月や芭蕉はいよいよ越後路に  
新涼の風に育つや旅心  
ケロイドの師は黙したり原爆忌  
原爆を体験した人たちと同じ気持ちになれる私たち世代。

遊子

邦夫選

新涼や会ふ人ごとにそのことを  
文月や小学生の書く平和  
秋涼し曾孫元気にお食ひ初め  
爽やかに、そして人をほっこり幸せにする句。

手花火の火玉ぽんと落ちにけり  
芭蕉葉の割れ目ひと筋鐘の音  
庭下駄の素足に添うて涼新た

遊子

盛雄  
兵十郎  
輝子

瑛三選

秋暑きそれでも出向くゴツホ展

茉衣

幹三

安廣

釣糸の雲に宿る秋涼し  
新鮮な発見。見事な感性。

和江選

新涼や会ふ人ごとにそのことを  
めぐりくる終戦の日夾竹桃  
全きも千々に裂くるも芭蕉なり  
風に遊ぶ芭蕉の様子を想像します。

暁子  
茉衣  
兵十郎  
瑛三

かな子選

新涼や会ふ人ごとにそのことを

文月や小学生の書く平和

秋涼し曾孫元気にお食ひ初め

爽やかに、そして人をほっこり幸せにする句。

暁子

兵十郎

瑛三

恵子選

芭蕉葉の割れ目ひと筋鐘の音  
手花火やをとめわらはのちひさき手

破芭蕉教会主は好好爺

この教会に行けたらお話しさせていただきたいです。

兵十郎選

庭下駄の素足に添うて涼新た  
手花火は闇と夜風の仲間なる

新涼のかけらさへなし特攻碑

特攻の碑に新涼の欠片も無いのは悲しい事実で同感。

堯子選

寛容であれと古刹の大芭蕉

文月や小学生の書く平和

達筆の朱に偲ぶ師や文月来る

太美子  
兵十郎  
輝子

書道を習う場面を「朱」という一文字で表現されたこと。

茉衣選

八月の海きつぱりと空分つ

文月の古本まつり森の蔭

海望む古刹に破れ芭蕉かな

太美子  
兵十郎  
遊子

寂れた寺と枯れた芭蕉葉を広い海が生き返らせる。

眞知子

新涼や五百羅漢のさんざめく

夕風にふと新涼のうす衣

文月や小学生の書く平和

平和を唱えながら空しく過ぎて行く文月、今年又。

盛雄  
太美子  
兵十郎

太美子選  
筆跡のやうな雲ある文月かな  
書く能力奪ひし病文月来る  
庭下駄の素足に添うて涼新た  
今朝は素足に庭下駄が心地よい。作者の感覚は鋭い。

輝子選

新涼や会ふ人ごとにそのことを

暁子  
幹三  
幹三

飛び石を飛びゆく先に涼新た  
新涼や手を丸くして掬ふ水  
新涼の水を掬う喜び。手を丸くしてという措辞がいい。

翠選

雨音のはつきりしたる芭蕉かな  
芭蕉葉の夜は人影のごと窓に

筆跡のやうな雲ある文月かな

筆跡のやうな雲、私も一度見てみたい。

邦夫  
暁子  
幹三

輝子  
邦夫  
翠

盛 雄選

ひりひりと火の散る線香花火かな

新涼の風に育つや旅心

釣糸の雲に宿る秋涼し

「雲に宿る」が涼しくなつた秋の風情を伝えて佳い。

安廣選

新涼のかけらさへなし特攻碑

筆太き書家の円相文月なる

実椿の大きさをぽんと海へ投ぐ

椿の実の大きさ重さが掌に実感として感じられる。

遊子選

新涼や剃刀を研ぐなめし皮

文月や書きかけたままの恋の文

筆太き書家の円相文月なる

文月七夕の日に恋文や円相の書を供えるのも麗しい。

乱選

祖母のゐて芭蕉の茂る家なりし

庭下駄の素足に添うて涼新た

芭蕉葉の夜は人影のごと窓に

夜の大きな芭蕉の葉を窓辺の人影と見た。

輝子 輝子 晓子

幹三 かな子 兵十郎

翠 兵十郎 兵十郎

幹三 晓子 安廣

参加者自選句

手花火の柳のしだれ黙の時

文月や芭蕉はいよいよ越後路に

文月や一筆書きの箋送る

新涼の淵に繰り出す鵜飼船

手花火に果つる華やぎ我が身にも

手花火に闇遠のきて子らの顔

破芭蕉教会主は好好爺

友逝きて線香花火ぼたり落つ

文月や文机ぼつんと部屋の隅

新涼や糊のききたるシャツを着る

新涼を待ち侘びて いる街の空

故郷に人を訪ぬる文月かな

庭下駄の素足に添うて涼新た

八月の海きつぱりと空分かつ

読み書きをスマホで済ます文月かな

全きも千々に裂くるも芭蕉なり

筆太き書家の円相文月なる

輝子 輝子 晓子  
乱 翠 太美子  
兵十郎

眞知子

遊子

盛雄

朱美

和江

堯子

瑛三

安廣

恵子

かな子

茉衣

邦夫

輝子

太美子

今日は、それぞれやむを得ない事情で欠席された方が多く、いつもよりこぢんまりした句会になりました。席題は二つ。一つは艶々した葉を付けた椿の枝に、大きなまだ青い実。もう一つは桔梗です。長旅で萎れていきましたが、句会の終盤、即吟の時間には見事に復活、美しい花を見せてくれました。時間の都合で、披講なしになりました。

「暑い」という言葉を聞かない事の無い毎日でござります。互選3句の投稿要領についてお願いを致しました所、多くの方が新しい形でお送り頂いております。ご協力本当に有難うござります。

刻々と紫深む桔梗かな  
花瓶より垂るるでつかき椿の実  
大いなる花咲く期待椿の実  
一輪の桔梗や壺によみがへる  
水を得て上向く勢青桔梗  
白桔梗酷暑に凜と挑むなり  
実椿に椿の赤さのこりをり  
大き事恥じるや句座の実椿よ  
夕されば句座に桔梗の濃紫

暁子  
邦夫  
太美子  
輝子

兵十郎

茉衣

幹三  
翠

安廣